

ずこぼつちや

神村ふじを

毎日毎日コロナのニュースでうんざりしている。ゴールデンウィークも外出するのはためらわれるので、畑仕事一色だ。いい加減嫌になる。そんなとき、珍しく妻から声がかかった。「外に出るのは駄目だけどドライブだけならいいんじゃない?」。「ドライブに行きませんか」という投げ掛けである。「よおーし、乗った」、車で軽く出掛けることにした。

軽くとは言ったものの、出掛けるからには隣県までは足を延ばしたい、そんな欲が出て、米沢から大峠を越えて喜多方へ。会津若松を回って只見線沿いに南下してから越後へ、そんなコースはどうだろうと考えた。

カーナビで確認すると、磐越西線沿いに阿賀町に抜けるのと、只見線沿いに魚沼市に抜けるのは何と120キロ以上も遠くなる。魚沼から長岡、三条、五泉、新発田、関川、小国、長井を通じて自宅に帰るだけでもものすごい距離になると感じながらも、コロナの影響でどこにも出掛けられ

ない日々を悶々と過ごしているので、外に出なければ、人と接触しなければ大丈夫と、自分に言い聞かせて出掛けることにした。妻もまんざらではないようである。

大峠は米沢と喜多方とを結ぶ主要な道路であり、明治時代に山形県初代県令三島通庸によって開削された。吾妻山の西方を通るため落石や崩落が後を絶たず難所として知られていた。もちろん冬期間は通行止めになっていた。

置賜と会津にとって悲願の新道建設は1973年(昭和48)に始まったが、県境の険しい山塊に阻まれ、1985年(昭和60)9月によく全長3940メートルの大峠トンネルが完成、山形県米沢市と福島県喜多方市の間が通年通行可能となった。

それからまた経過すること25年、最後まで残っていた喜多方市熱塩加納町の約2・6キロメートルの未開通区間が2010(平成22年)9月に開通し、ようやく置賜と会津が通しでつながった。工事開始から何と37年が経過していたのである。

米沢と会津の関係は深い。因縁めいた感じすらする。米沢は、戦国時代の1548年(天文17)から伊達氏の本拠地であった。

1589年(天正17)6月、伊達政宗は摺上原の戦いで芦名氏を滅ぼし、芦名氏の居城であった若松城を本拠地とした。

1590年(天正18)の有名な小田原征伐において、参陣遅れで秀吉の怒りを買った政宗は、秀

吉の奥州仕置により再び本拠を米沢に戻された。

1591年（天正19）秋、政宗は大崎・葛西に移封され、会津は蒲生氏郷、米沢には蒲生郷安が入ることになった。

1595年（文祿4）氏郷が死去、嫡子の秀行が13歳で家督を継ぐが、秀吉の命により会津92万石から宇都宮18万石へと減封移封された。

蒲生氏に代わって会津に入封したのは越後春日山城主の上杉景勝である。領地は蒲生旧領と出羽庄内に佐渡を加えた120万石であり、景勝は家老直江兼続を米沢に入れ30万石を与えた。

こうして改めて見てみると、会津と米沢の関わりは大名の関わりであることが分かる。大名の移封に伴って多くの家臣、職人、町民が動いたのは想像に難くない。

「会津っぽ」という言葉がある。会津人の気風、性格を表す言葉だ。

夏目漱石の小説『坊っちゃん』の中で、同僚の山嵐に問い掛けるシーンがある。

「きみはどこだ」

「僕は会津だ」

「会津っぽか、強情な訳だ。……」

この言葉、「会津っぽ」の意味は、会津人の一徹さ、頑固さ、一度決めたら揺るがない、そんな気質をひと言で表す言葉だそうだが、その例に倣うように、幕末に新政府軍と最後まで戦った会津

藩の家老西郷頼母の養子西郷四郎は、柔道家として大成した。「会津っぽ」の性格が少なからず影響しているのだろう。1942年（昭和17）に発表された富田常雄の小説『姿三四郎』のモデルになっている。

米沢にも知人、友人がいるが、「会津っぽ」らしさを感じたことはない。まあ人によるということなのだろうが、ただ、どことなく上杉の城下町としての誇りを漂わせている人が多いという印象はある。

もう30年以上前のことになるが、置賜地方の友人と飯豊の登山口梅花皮山荘に一泊したことがあった。朝食は、登山基地なのでテラスとまではいかないが、朝日の望める中庭でとることになった。

隣では飯豊山から下山してきたと思われる高校生のグループが朝食をとっていた。キスリングやジャージには会津高等学校と校名が入っていた。福島県立会津高等学校の山岳部であることが分かった。その食欲たるや瘦せぎすの細い体であるにもかかわらず、さすが山岳部、半端ない食欲である。食べるのを忘れ呆然と見ていた記憶がある。

食べ終わると、一人の高校生が椅子にもたれながら、

「あーあ、ずこぽっちゃ」

と声を発した。

それを聞いた友人は、ぼそつとひと言。

「ああ、負けた」

村山出身の私には、「ずこぼっちゃ」の意味も、事の顛末も、少しも理解できなかった。

あとから分かったことだが、「ずこぼっちゃ」は「腹がいっぱいになった」「もう動けない」という意味だそうで、また、友人が「負けた」と思ったのは、置賜弁のルーツは会津であることをよく理解していて、ネーティブな「ずこぼっちゃ」を生の声で聞いて、「負けた」と思ったとのことだった。

置賜弁と会津弁のつながりは深い。そこそこ生きている言葉であるようだ。

大河ドラマ『八重の桜』の放送では、「んだげんじょ（そうだけれども）」と綾瀬はるかが喋っていたのを思い出した。置賜の小学校に勤めていた頃、子どもたちが盛んに「んだげんじょ」と話していたのと重なり、今懐かしく思い出しているところである。

